

吹田に残る「阪田三吉」の息遣い

「阪田三吉」が吹田に住んでいた

新山ひろし

「阪田三吉さんは、アサヒビールの社長の高橋龍太郎さんと一緒に、ここに将棋をによく来られてたと言っています」と旧西尾邸のガイドの湊成昭さん。将棋で有名な、あの阪田三吉が吹田に住んでいたという。高橋氏所有の借家に住んでいた。西尾家とは、代々、上皇の所領「仙洞御料」に米や野菜を納入した庄屋であったことが知られている。

先回 vol.8 で取材した、植物学者の牧野富太郎も常連客の一人だった。その西尾家と阪田三吉、しかも、アサヒビールの社長が関係している。

三吉の使った将棋盤と駒が残されていた

湊さんは「西尾家11代が将棋のために造った部屋がありますよ」と



中村浩

小学館発行の『棋神・阪田三吉』より



脚色され、あまつさえ歌謡曲に歌われるに及んで、似ても似つかぬ伝説的人物阪田三吉が、日本中を闊歩するに至った」と書く。さらに「阪田三吉は、決して、舞台や映画、テレビの画面に登場してくるような偉丈夫ではない。短い脚の上に長い胴が乗った五尺そこそこ、このずんぐりむっくり、髪の毛は固いのか、いつも五分刈りくらいにしていた」ように、「いささかそっかしいところはあるが、馬鹿どころか、大阪のいわゆる、とぼけた阿呆であったようである、鋭い勘と頓知の持ち主であった」というのが実像に近そうだ。

ではなぜ、そのような「似ても似つかぬ伝説化」が起こったのであろうか。中村浩さんの本ではよく分らない。ただ、阪田三吉は



旧西尾邸のガイドの湊成昭さん

字が読めず、しかも、天才的、型破りな将棋は師匠を持たなかったからだと考えられる。三吉の生きた頃に、彼の業績を常設展示する「阪



西尾家11代目の肖像画

家は「邸前から左折して200メートルほどの所」とある。

西尾家とは、歩いて5分もかからない距離だ。この頃、三吉の妻、コウウ（小春は映画での名前）さんは、三女の美代子さん誕生を控えていた。三吉は55歳。「関西名人」を名乗るといふ事件の直後のことである。この「関西名人位」については、少し解説が必要だろう。将棋の名人位は、その頃は「永世名人」、つまり、生涯にわたる名誉ある称号だった。小野名人が死んで、実力や人気は一番だった阪田三吉が継ぐべき状況ではあったが、なぜか東京の関根名人の誕生となる。それを不当として、関西で80人も人が決起し、三吉を「関西名人」に持ち上げ、東京名人と渡り合ったのである。そして三吉はその対立の矢面に立たされることとなった。

そのため、三吉は肉体的にも、経済的にも、社会的にも孤立を余儀なくされる。この危機に、大日本麦酒（後のアサヒビール）大阪支店長だった高橋龍之介が援助の手を差し伸べ、三

なぜ、三吉は吹田に住んだのか

中村浩著の「棋神・阪田三吉」によれば「大正13年、高橋龍太郎は、病やつれた阪田夫妻に、吹田の自邸（現吹田市南消防署の地、内本町一丁目）を提供した」とあり、翌年、高橋所有の借家に移ったという。借

田三吉記念室」が「船松人權歴史館」の中にある。ここでは三吉の直筆の扇子や駒、生い立ちのビデオなどを無料で見ることが出来る。記念室で、三吉の「伝説化」についてたずねると、幾冊かの本を紹介していただいた。

阪田三吉の生い立ちの物語「さんきい物語」によれば、彼の家は貧しく、いつも背中に赤ん坊を背負い、大人と将棋をしていたという。将棋は、貧乏だった村の人々にとって、お金のからまない大切な娯楽だった。その村で、三吉少年は、子供時代から才能を発揮していく。「奇襲攻撃」とも言われた、三吉の将棋は、師匠を持たない素人の才気から生まれた独創だからなのである。それにしても、阪田三吉は、将棋に対する別格の才能を持っていた。育ちは貧乏だが、実力はすごい。字が読めないこと、横紙破りな棋風、そこが「永世名人」



西尾家11代が将棋のために造った部屋



阪田好（さかたこのみ）と彫られた駒

の資格に関係していたようだ。しかし、どう見ても阪田三吉には、技と魅力があった。そのような三吉の不運を、周りの人々はほめておくわけがなかった。三吉の人生のドラマを日本人は求めた。「貧しさ」の屈辱と誇りの感動の劇である。

三吉の悲劇と栄光

昭和21年、阪田三吉は77歳で亡くなったが、その翌年から、映画、芝居、小説と、三吉の神格化が始まる。その神格化には、彼には何の罪もない。吹田にも「紳士だった」「心配りのできる人だった」「ドラマと全然違う」など、いくつもの証言が残されている。

そして、三吉没後9年目にあたる昭和30年、阪田三吉に将棋連盟から「名人位」と「王将位」が追贈されることになった。ここには、80歳にな

吉の吹田時代、つまり「関西名人としての三吉」時代が始まったのである。ところで高橋龍之介は、ドイツにビールの製造の勉強に行き、それまでドイツ人に頼っていたビール製造を初めて日本人の手で行ったという歴史の上の人でもある。当時、三吉の関西名人支援を行った80人のうちの一人で、その後、高橋は、アサヒビール社長となり、戦後は政界に出て、吉田内閣の通産大臣も務めた。太腹な高橋龍太郎は「稽古料」という形で、阪田家に手当を毎月渡した。その稽古場の一つが西尾家だったということになる。

西尾家の11代目は、大正14年死去であるから、一年ほどは阪田三吉と将棋の師弟関係を結んだとも想像できる。この時、阪田三吉55歳。高橋龍太郎51歳、西尾家11代は64歳である。

ちなみに、先回取材した植物学者牧野富太郎はこの頃、60歳、当然、接近遭遇していたとみたい。大正末年のモダンな吹田物語の空気が見えてくる。

阪田三吉はドラマとは違う性格だった

ところで、中村浩は「舞台上の三吉から、ついで映画の中の三吉、テレビの中の三吉へと、繰り返し登場し、つた高橋龍太郎の積年の深い思いが込められていた。さらに、昭和31年、高橋が費用の一切を負担し、将棋連盟名義で「王将阪田三吉之墓」が豊中市服部霊園に建てられた。碑文には「まことに偉大なる棋士といふべし。日本将棋連盟は昭和30年10月1日、阪田先生に名人、王将位を贈り碑を建て、これを後世に遺すものなり」とある。僕には、阪田は関西名人になりた一度も思ったことがないと思える。ただ、80人の人に押され、関西人の意を汲み、立った。それは、阪田の優しさに違いない、と思えてしようがない。誰より、高橋龍之介がそれを一番知っていたはずである。（了）

協力 ▼ 旧西尾家住宅（吹田文化創造交流館）JR吹田駅徒歩10分 電話06-6381-0001 吹田市内本町2-15-11 入館無料 9:00~17:00  
▼ 船松人權歴史館「阪田三吉記念室」堺市堺区協和町2丁61 堺市立人権ふれあいセンター7階 電話072-245-2536 入場無料 開館時間 9:00~17:15  
参考文献 「反省の棋士・阪田三吉・その栄光と苦難の道」編集・発行 船松歴史資料館 1998年初版 / 「さんきい物語」へのまつ村の阪田三吉」発行・部落解放地域区船松歴史・文化を守る会 2003年 / 「棋神・阪田三吉」中村浩著 1980年講談社 / 「ある町の百年」週刊朝日編 昭和44年朝日新聞社 / 「伝説と神史」上・下編」伝説民話文学研究会編 昭和55年 新和出版 / 「可能性の文学」織田作之助 昭和21年 / 「現代河原乞食考」山城新伍著 1997年 解放出版社